

# 地域再生とまちづくり

<第8回>

各都市が目指すものは

## 人口は減少、衰退傾向

現在の山鹿市は、05年1月

16年4月1日の人口は約5

万2000人で県内では8番目に多いものの、熊本市から比較的距离があり、市内にはJ R 駅や高速のインターチェンジもなく、また主要産業もないことから、人口減少傾向が続いている。その結果、住宅地の地価も10年以上下落傾向が続いている。住民の高齢化も進行し、新規の宅地需要が増加することも考えにくく、将来的にも地域の衰退化が継続すると考えられる。



復元された「さくら湯」



山鹿灯籠像



重要文化財の八千代座

に旧山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町の合併により誕生した。県都熊本市の北部に位置し、福岡県、大分県に隣接。北部は緑豊かな山林に覆われ、南部は田園地帯が広がり、その中心部に市街地があり、幹線道路網が放射線状に整備されている。土地利用状況は、農用地と森林の割合が高く、総面積の50%超を占

宅地の地価も10年以上下落傾向が続いている。住民の高齢化も進行し、新規の宅地需要が増加することも考えにくく、将来的にも地域の衰退化が継続すると考えられる。そこで危機感を抱いた山鹿市は地域活性化に力を入れ、その一つである観光が成果を挙げ、交流人口の増加に寄与している。

熊本市全体の観光客数の動向は、11年から13年が微増傾向で、外国人観光客も13年に

温泉浴場「さくら湯」が復元された。また、有名歌舞伎役者、くまモンの来訪によるPRもあって八千代座や山鹿灯籠浪漫百華百彩などへの客数は堅調に推移してきた。

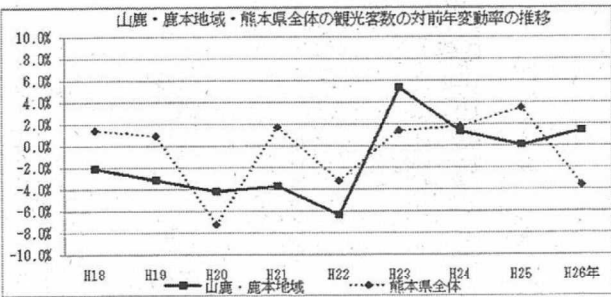
## 熊本地震の影響注視

## 熊本市山鹿市・交流人口の増加で活性化図る

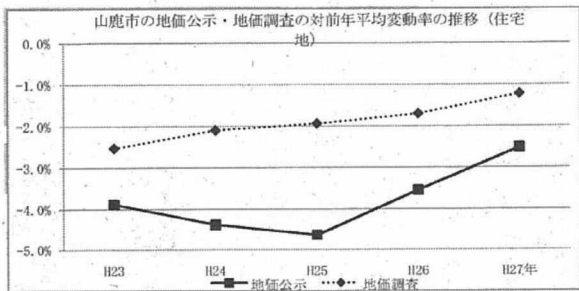
が、4月14日の前震に端を発した「平成28年熊本地震」の影響により、地震後の県内には観光客の姿はほとんどみられず、観光資源である熊本城の城壁の一部崩落、阿蘇方面の土砂災害などが相まって観光面にも悪影響を及ぼすことは間違いない。

農林漁業でも甚大な被害が発生しており、幅広い業種で経済活動の停滞が長期化する可能性がある。こうした状況を受け、熊本地震が県内の経済に与える悪影響が不動産市場にも及ぶ可能性があることから、今後の動向には注視が必要である。

（日本不動産研究所熊本支所、田上英憲）



(注)熊本県「平成26年熊本県観光統計表」を基に作成



## 歴史的温泉浴場も復元 観光資源生かし堅調推移

初めて40万人を超え過去最高を記録したが、14年は阿蘇山の噴火警戒レベルが引き上げられたことで減少に転じた。これに対し、山鹿・鹿本地域の観光客数は06年から10年にかけて減少傾向だったが、11年以降は増加傾向が継続している。福岡―山鹿間の直行バスの廃止や、新幹線開業による玉名温泉などへの顧客流出も一部にはみられるが、15年末に有名宿泊予約サイトが発表した温泉地総合満足度ランキングで全国第2位に輝いた山鹿・平山温泉があり、12年10月には江戸時代からの歴史を誇る九州最大規模の木造

温泉浴場「さくら湯」が復元された。また、有名歌舞伎役者、くまモンの来訪によるPRもあって八千代座や山鹿灯籠浪漫百華百彩などへの客数は堅調に推移してきた。